

本学の教職課程の在り方についての考察

— 教職課程履修学生への調査結果からの第一報 —

白 山 雅 彦

はじめに

2014（平成26）年10月から本学で教職課程の専任教員となった私は、着任してからまもなくして、来年2015（平成27）年度の「教育実習」担当者になる予定であることを告げられた。

そもそも私は、高等学校教員と県教育委員会職員を経験してきたが、大学での教鞭は初めてのことであり、前任者からの助言を参考に一から準備をしながら教職課程履修の4年生後期の必修「教職実践演習」の授業を始めたばかりの頃であった。そこで、さっそく「教育実習」についても文献調査等の準備に取りかかった。

ここ数年前から文部科学省の指導もあって、本県の秋田大学はもちろんのこと国内の各国立大学の教員養成系学部や学科に小・中学校や高等学校、特別支援学校の校長等を経験した定年退職者、あるいは学校現場の教員を大学の教員として採用する動きが多く見られるようになってきている。私も本学においてそうした教員の一人として見られているかどうかは別にして、授業の準備をしながら、自分のこれまでの経験を教職を目指す学生の指導のために役立つよう、持ちうる全てを出し惜しみせずに授業等に活用したいと考えた。

特に「教育実習」は、大学の教職課程における貴重な実践の場と位置付けられており、学生がそれまで専門や教職課程などの授業での講義や演習等を通じて考え、調べ、学びながら蓄積してきたことをもとに、実際に学校の生徒の前で指導する絶好の機会であり、それを担当する者としては、その実習で学生たちが力を発揮できるよう指導したいと考えるのは当然である。

私は、高校現場で教育実習生を指導する教員

として携わってきた経験がある。その当時、教育実習生である学生を担当しながら、その学生の実習を依頼してくる大学の教員養成の在り方について考えたものである。つまり、大学で教職の意味や使命などをどれだけ学んできたのか、専門教科や教職課程の授業で教科の指導法などをどれだけ学んできたのか、教壇に立てるだけの指導力をどれだけ身に付けてきたのかなどについて、学生を通して大学を見たのであった。そしてまた、各大学が作成した教育実習生用の実習日誌や各種記録などを記入する『教育実習ノート』、あるいは『教育実習記録簿』等に接し、その内容や形式も様々であることを知り、各大学の教員養成上の指導法や取り組み方等の一端を見て違いを感じたのであった。

そこで私は、「教育実習」の準備をするにあたって、本学の『教育実習の手引き』などの存在を確認したところ不存在だった。教職課程を設置していながらこうした基本的なものを設けていないことに驚きながらも、即座に翌春に使用するための『教育実習の手引き』の必要性を関係者に伝え、11月からその作成に着手し、秋田大学教育文化学部及び秋田県総合教育センターの文献等を参考にして2月に完成させた。同時に既存の『教育実習記録簿』についても内容を確認した上で一部の様式等を改善する必要性を説き、その作成にも着手し、4月に完成させた。これらは、本学の「教育実習」の体制整備を意図したものである。

教職課程は、多くの教員が分担して教育職員免許法第5条別表第1にあるように、「教科に関する科目」、「教職に関する科目」、「教科又は教職に関する科目」の各分野の授業及び教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目の授

業を担当している。ちなみに、本学の教職課程は、高等学校一種免許状（理科・工業・農業）の課程認定を文部科学省から受けている。

本学でこの教職課程の全般を事務的に掌握しているのが教務チームであり、さらに教職課程のあり方に対して管理的・指導的立場にあるのが教職課程運営委員会である。特に、教職課程運営委員会は、本学の教員養成の理念及び構想を踏まえつつ、教職課程編成の基本方針及び授業計画、教育実習の運営及び実習校との調整、教職実践演習の在り方、学生の免許状取得指導、教員採用試験等の支援、教員免許状更新講習、その他教職課程全般にわたって審議する存在（「秋田県立大学教育改革・支援センター教職支援室設置要綱」より）である。すなわち同委員会は、教員養成の理念や構想に基づき、教職課程に関する教育課程を編成し、授業や教員の質の維持・向上に努め、教職課程を履修する学生のために、授業や教育実習、免許状取得、教員採用試験等についてどう指導・支援していくかについて審議し、それを担当の教職員に周知し共通認識の上で取り組んでいこうとする管理的・指導的な、極めて影響力が大きい存在である。しかし一方では、なくてはならないと思われるものが備わっていなかったり、学校の教員として養成すべき学生の教職への意欲喚起や学校の教員として必要な資質・能力の育成方法、学習指導や生徒指導等の実践的な取組が不足していたりする現状の教育課程への改善策等には物足りないところがあるように思われた。

また、本学は開学17年目であるが、教職課程について大学が掲げている教員養成の理念を見直す必要はないか、中央教育審議会（以下「中教審」とする。）の答申や、文部科学省が教員養成について大学に発出した通達等により、教職科目の担当教員が養成指導上の在り方に対して共通認識を持って授業等で指導しているかなどの、教職課程の体制の基盤となる部分についても確認しなければならないと考えた。

そこで私は、教職課程を履修する学生達が、学校の教員に必要なとされる資質や能力等の様々な力をつけるため、あるいは学生各人が掲げる教職に関するそれぞれの目標、例えば教員採用試験に合格することなどの目標の達成を支援す

るために、本学の教職課程がどうあればよいかということなどについて考察することにした。さらにその先には教職課程運営委員会がどういう在り方をすればいいかということについても考えることにした。

1 手 法

初年度は、本学の教職課程を履修しているシステム科学技術学部と生物資源科学部の両学部生に対して教職に関する実態調査と意識調査を実施した。実態調査としては、大学の資料から、①本学の学生のうちどれぐらいの比率の学生が教職課程を履修しているか、②どれぐらいの学生が教育職員免許状（以下「教員免許状」とする。）を取得しているか、③どれぐらいの卒業生が教職に就いているか等を経年変化で調べ、本学の教職課程に係る学生の基礎データを得た。

意識調査として実施したアンケート調査では、その対象を2015（平成27）年に私が担当したいずれも必修科目である「教師論」（1年生主体）、「生徒・進路指導論」（2・3年生主体）を履修した学生とした。加えて4年生の後期の必修科目である「教職実践演習」で履修カルテに学生が自己評価したものを、4年間教職課程を全うしようとしている学生の自己分析の結果として活用した。アンケートでは、①教職課程を履修している学生の履修目的、②どのような教師を目指したいか、③学生が教員に必要な資質について自分をどう見ているか、④自分に不足している教員の資質・能力等をどう磨くつもりなのか等について調査を実施した。そのアンケート調査以外にも、授業レポートや、4月から私に面談を希望してきた学生の声、10月1日に私が開設した「教職課程相談コーナー」に来た学生の声も彼らの意識として参考にした。これらの結果を実態調査結果と照らしながら見えてくるものは何かを探ることにした。

そして次年度は、こうした調査から得られた結果をもとに、本学の教職課程の授業において、どのようなことを意識して授業を通じて学生に学校の教員としての資質・能力を養っていったらいいか、実践的指導力を身に付けさせたらいいかなどを中心に、教職課程の授業を担当する

教員の共通理解と意識改革等に結びつける方策等について考えたい。

さらに、その先において、本学の教職課程運営委員会が果たすべき役割や在り方等についても考察したい。

2 実態調査の結果について

本学は平成11年4月に開学し、その後に教職課程が設置され、学生の履修が始まった。しかし、初年度以降しばらくの間、各学年の教職課程履修者数の集計上の基準が不揃いであったことからデータとして単純に比較することができないため、平成22年度以降の数字をもとに、入学者に占める1年次生の教職課程履修者の比率と、2・3年次生の履修者数、4年次生の卒業者に占める教職課程履修者の比率等から履修状況を確認した。さらに本学部生の教員免許状の取得状況と、学校の教員としての就職状況についても実態を調べた。

(1) 履修状況：①システム科学技術学部

表1の①の表を見ると、H22～H27の6年間

表1
教職課程履修者数と履修率（平成22～27年度入学生）

① システム科学技術学部

(単位：人)

平成27年11月17日現在

年度	1年次生	履修率%	2年次生	3年次生	4年次生	履修率%	備考
H22	31	11.9	23	18	18	7.8	
H23	24	9.7	16	15	14	6.2	
H24	16	6.4	15	15	13	—	現4年次生
H25	45	18.7	17	14	—	—	現3年次生
H26	37	15.1	27	—	—	—	現2年次生
H27	23	9.5	—	—	—	—	現1年次生
平均	29.3	11.9	19.6	15.5	15.0	7.0	

② 生物資源科学部

(単位：人)

年度	1年次生	履修率%	2年次生	3年次生	4年次生	履修率%	備考
H22	36	22.4	23	18	18	12.0	
H23	32	19.4	28	21	18	11.5	
H24	48	31.0	46	20	17	—	現4年次生
H25	33	20.8	27	24	—	—	現3年次生
H26	27	17.3	27	—	—	—	現2年次生
H27	34	20.9	—	—	—	—	現1年次生
平均	35.0	22.0	30.2	20.8	17.7	11.8	

※年度欄のH22は、平成22年度のことであり（以下、全ての表も同様である）。

※履修率は、入学者に占める1年次生の履修者と、卒業者に占める4年次生の履修者の比率のみを算出した。

の1年次生の履修者数は年度によって多少でこぼこはあるが、平均して29.3人であり、入学者に占める割合も同じように入りはあるが平均で11.9%である。2年次生と3年次生は履修者数しか示していないが、平均でそれぞれ19.6人、15.5人であり、1年次生と比べると年々減少していることが分かる。そして4年次生の履修者数の平均は15.0人で、履修率も7.0%と1年次に比べ大きく減少している。

(2) 履修状況：②生物資源科学部

同じように表1の②の表を見ると、1年次生の履修者の平均は35.0人で、履修率は22.0%である。2年次生と3年次生の履修者数の平均はそれぞれ30.2人、20.8人であり、4年次の平均は17.7人で、履修率も11.8%である。システム科学技術学部と比べると履修者数も履修率も高いことが分かるが、学年進行とともに履修者が減少している。両学部ともに4年間で約半数に減少していく傾向は同様である。平均履修率の4年間で減少幅は、システム科学技術学部がマイナス4.9ポイントであるが、生物資源科学部では、マイナス10.2ポイントと大幅に減少し

ている。

(3) 教員免許状の取得状況：①システム科学技術学部

次に、表2で教員免許状の取得状況を見る。

①システム科学技術学部では、開学以来合計148人が取得しており、開学初年度入学生が卒業してから平成23年度の卒業生までの13年間の年平均では11.4人となる。毎年度の卒業者に占

める免許取得者の割合の平均は5.1%であった。

また、同学部では高等学校理科と工業の免許状を取得することができるが、13年間の合計で理科が98人、工業が112人であった。工業の免許状取得者が多いのは、教育職員免許法にあるいわゆる工業特例（「教育職員免許法」附則第11項）により、教育実習をしなくても免許状を取得できる道が今も残されているため、理科の

表2
入学者数・卒業者数・教員免許状取得者数一覧（学部別）

平成27年11月17日現在
（単位：人）

学部	① システム科学技術学部						② 生物資源科学部					
	240						H11～H17：110、H18～：150					
年度	入学	卒業	免許状 取得者	取得者 率%	理科	工業	入学	卒業	免許状 取得者	取得者 率%	理科	農業
H11	255	226	10	4.4	6	8	120	116	23	19.8	22	14
H12	242	218	15	6.9	7	13	112	109	10	9.2	9	4
H13	243	222	9	4.1	8	2	116	106	5	4.7	5	2
H14	242	211	15	7.1	11	11	118	119	16	13.4	15	3
H15	241	211	13	6.2	2	13	119	117	11	9.4	11	6
H16	245	219	6	2.7	5	5	118	114	21	18.4	20	10
H17	239	219	12	5.5	11	12	116	110	16	14.5	15	6
H18	260	233	10	4.3	6	7	157	150	24	16.0	20	9
H19	246	228	5	2.2	4	5	162	154	19	12.3	17	6
H20	249	233	9	3.9	8	5	161	153	18	11.8	16	10
H21	255	236	12	5.1	9	8	161	151	17	11.3	7	11
H22	261	231	18	7.8	14	10	161	150	18	12.0	12	9
H23	248	225	14	6.2	7	13	165	157	18	11.5	16	5
H24	251	—	—	—	—	—	155	—	—	—	—	—
H25	241	—	—	—	—	—	159	—	—	—	—	—
H26	245	—	—	—	—	—	156	—	—	—	—	—
H27	242	—	—	—	—	—	163	—	—	—	—	—
合計	4,205	2,912	148	5.1	98	112	2,419	1,706	216	12.7	185	95
	13年間の平均		11.4				13年間の平均		16.6			

※入学と卒業の数字は、例えばH11年度に入学した学生数に、卒業時には途中で退学や転・編入した学生数も加味したものである。

※免許については、当該年度入学者が秋田県教育委員会に申請して取得した人数である。

ただし、取得年度はまちまちである。

※生物資源科学部の定員は、H18年度にアグリビジネス学科が設置されるまでは110人であった。

※一人で2つの免許を取得する学生もいることから免許状取得者数と教科別の人数は一致しない。

免許状とともに工業の免許状を取得することに学生があまり負担を感じないからではないかと考える。

(4) 教員免許状の取得状況：②生物資源科学部

同じように、表2で②生物資源科学部について教員免許状の取得状況を見ると、開学以来216人が取得している。13年間の年平均で16.6人が取得し、卒業者に占める免許取得者の割合は12.7%であり、システム科学技術学部よりも取得者数も取得率も高いことが分かる。生物資源科学部では、高等学校理科と農業の免許状を取得することができる。こちらの学部では、理科の免許状取得者数が185人で、農業免許状取得者の95人の約2倍となっている。2006（平成18）年4月にアグリビジネス学科が設置されたが、それ以降農業の免許状の取得者が特に増えるという傾向は見られない。同学部はシステム科学技術学部と比べると、女子の比率が高い

表3

教育職員免許状取得状況及び教員就職状況

（平成27年度在籍者数に占める女子学生の割合は、システム科学技術学部14.7%、生物資源科学部40.5%）ため、専門分野の授業や実験で生物や化学に関する研究等に接する機会が多いことから、理科の免許状取得者が多いのではないかと考える。これは、経験則として認識していることであるが、高等学校における理科の科目選択において女子生徒は物理に比べて、化学と生物を選択する率が圧倒的に高い傾向にあることと呼応していると思われる。

(5) 学校の教員としての就職状況

卒業者のどれぐらいが、教職に就いているかを調べた結果を示すのが表3である。1期生2人、2期生1人のあとは3年間ゼロだったが、平成19年度卒の6期生で3人、その後ゼロの年はなく、平成23年度以降は2～5人で推移している。実数が少ないので一概には言えないが、開学当時に比べると教職に就く人数は若干では

平成27年11月17日現在
(単位：人)

年度	システム科学技術学部					生物資源科学部					免許状 取得者実 人数合計	教員 就職者 数合計
	教員免許状取得者数			教員就職者数		教員免許状取得者数			教員就職者数			
	実人数	理科	工業	教諭	講師	実人数	理科	農業	教諭	講師		
H14	10	6	8			23	22	14	2		33	2
H15	15	7	13	1		10	9	4			25	1
H16	9	8	2			5	5	2			14	0
H17	15	11	11			16	15	3			31	0
H18	13	2	13			11	11	6			24	0
H19	6	5	5			21	20	10	2	1	27	3
H20	12	11	12			16	15	6	1		28	1
H21	10	6	7	1	1	24	20	9	3		34	5
H22	5	4	5			19	17	6	1		24	1
H23	9	8	5	1	1	18	16	10		1	27	3
H24	12	9	8	1		17	7	11	1		29	2
H25	18	14	10	1	2	18	12	9	1		36	4
H26	14	7	13		2	18	16	5		3	32	5
合計	148	98	112	5	6	216	185	95	11	5	364	27

※表中の教員就職者数は、大学で把握している情報である。2015（平成27）年度実施の教員採用試験の結果を踏まえた数字である。

あるが増える傾向にあるようだ。

3 意識調査の結果について

(1) アンケート調査結果より

表4 「教員免許状の取得目的は何か？」について

両学部の1年生も2・3年生も、「資格取得のため」がもっとも多く、合計で69人、割合は34.3%であった。次いで、「将来教員採用試験の受験もあり得るので」が47人、23.4%、続いて「今はとりあえず」が36人、17.9%で、「教員採用試験受験のため」は23人、11.4%であった。驚いたのは、人数も割合も上記4項目よりは少ないが、「取れと言われたから」が12人、6.0%もいた。

「資格取得のため」や「今はとりあえず」、「取れと言われたから」は、教員採用試験を意識しているとの回答に比べると、教職に就くことには消極的な目的意識と言える。そうした意識の学生が教職履修者に多いことが分かった。

1年生と2・3年生の回答はほぼ似通っているが、「今はとりあえず」という回答が2・3年生で4.5ポイント減少していること、「資格取得のため」は2・3年生で3.7ポイント増えて

いること、「将来教員採用試験の受験もあり得るので」でも2.3ポイント増えていることから、学年進行とともに履修者は減少傾向にあるものの、教員免許状を取得する、あるいは将来的に教員採用試験を受験することを視野に入れるという意識を持った学生が継続履修していると考えられる。

一方、1年生で19.8%が「今はとりあえず」と回答しているが、入学当初、教職課程というものを漠然とした資格取得の機会として捉えるなどあまり深く考えずに履修したのではないかと思われる。こうした消極的目的意識を持った学生の中から、教職課程の授業を負担と感じたり、教職への魅力を感じるができなかったり、自分は教職の道に進む自信がないなどと考えたり、教職以外に自分の将来像を見いだしたりするなどして履修を断念する学生が出るのではないかと考える。

ちなみに、相談に来た学生から途中でリタイアするに至った理由を聞いたところ、主なものとしては、「教員免許状を取りたい気持ちはあるが、専門科目の授業や実験、研究への取組で精一杯だから」、「アルバイトやサークル活動との両立が難しくなったから」、「将来を考えて仕事が厳しい教職は自分には無理だと考えたから」、

表4 教員免許状の取得目的は何か？

(単位：人)

質問項目	「教師論」履修の主に1年生				「生徒・進路指導論」履修の2・3年生				合計人数	合計の割合
	秋田C	本荘C	合計	割合	秋田C	本荘C	合計	割合		
1 資格取得のため	21	17	38	32.8%	14	17	31	36.5%	69	34.3%
2 教員採用試験受験のため	9	4	13	11.2%	4	6	10	11.8%	23	11.4%
3 今はとりあえず	14	9	23	19.8%	8	5	13	15.3%	36	17.9%
4 将来教員採用試験の受験もあり得るので	15	11	26	22.4%	9	12	21	24.7%	47	23.4%
5 取れと言われたから	5	3	8	6.9%	1	3	4	4.7%	12	6.0%
6 不明確	3	2	5	4.3%	2	1	3	3.5%	8	4.0%
7 友人に誘われたから	0	2	2	1.7%	2	0	2	2.4%	4	2.0%
8 その他	0	1	1	0.9%	0	1	1	1.2%	2	1.0%
合計	67	49	116	100%	40	45	85	100%	201	100%

※「教師論」履修者：秋田Cの回答者38人+本荘Cの回答者28人=66人

※「生徒・進路指導論」履修者：秋田Cの回答者22人+本荘Cの回答者26人=48人

※回答は複数回答のため、表中の人数は延べ人数である。

「教職の道以外に自分の進みたい方向性が見いだせたから」等であった。

表5 「将来どのような教師になりたいか？」
について

1年生で最も高い割合を示したのが〔その他・無回答〕14人、15.1%だったのに対して、2・3年生では〔楽しく分かり易く喜びや感動を与えられる授業ができる教師〕が15人、18.8%であった。次いで1年生では〔発言・行動に責任を持ち信頼され共に困難を克服しようとする教師〕が13人、14.0%。2・3年生では〔授業だけでなく生徒指導や進路指導も親身になれる教師〕が12人、15.0%であった。2・3年生になるとなりたい教師像がより具体的になっているようだ。1年生はまだ具体的な教師像を明確に持てない学生が多くいることを示しているのではないだろうか。全体合計で見ると、〔その他・無回答〕以外では、〔楽しく分かり易く喜びや

感動を与えられる授業ができる教師〕が25人、14.5%。次いで、〔発言・行動に責任を持ち信頼され共に困難を克服しようとする教師〕が21人、12.1%、〔専門的知識や幅広い教養を持ちどんな質問にも対応できる教師〕が18人、10.4%で上位を占めた。これ以外では、1年生でやや比率が高かったのは〔生徒の個性を生かし夢や希望を与え背中を押せる教師〕や〔生徒が希望する進路に進めるよう支援できる教師〕であった。2・3年生では〔親しみやすく生徒の話を聞き公平に接することができる教師〕がやや高い比率であった。分かり易い授業ができて、専門性に優れ、生徒の考えや気持ちをしっかり受けとめながら、学習指導だけでなく生徒指導や進路指導においても生徒のために親身になり、責任を持って支援できる信頼される教師像が浮かび上がってくる。

表5
将来どのような教師になりたいか？

(単位：人)

質 問 項 目	「教師論」履修の主に1年生				「生徒・進路指導論」履修の2・3年生				合計 人数	合計の 割合
	秋田C	本荘C	合計	割合	秋田C	本荘C	合計	割合		
1 発言・行動に責任を持ち信頼され共に困難を克服しようとする教師	8	5	13	14.0%	2	6	8	10.0%	21	12.1%
2 生徒の個性を生かし夢や希望を与え背中を押せる教師	7	2	9	9.7%	4	2	6	7.5%	15	8.7%
3 生徒が希望する進路に進めるよう支援できる教師	7	1	8	8.6%	2	1	3	3.8%	11	6.4%
4 生徒に向き合い同じ目線で本音で語り合える教師	6	1	7	7.5%	3	2	5	6.3%	12	6.9%
5 楽しく分かり易く喜びや感動を与えられる授業ができる教師	5	5	10	10.8%	9	6	15	18.8%	25	14.5%
6 専門的知識や幅広い教養を持ちどんな質問にも対応できる教師	4	6	10	10.8%	2	6	8	10.0%	18	10.4%
7 生徒に寄り添いケジメを持ちつつ友達のような存在になれる教師	3	2	5	5.4%	3	2	5	6.3%	10	5.8%
8 規律ある生活を送られるよう、正しい方向に導ける教師	3	1	4	4.3%	1	1	2	2.5%	6	3.5%
9 親しみやすく生徒の話を聞き公平に接することができる教師	3	1	4	4.3%	6	2	8	10.0%	12	6.9%
10 授業だけでなく生徒指導や進路指導も親身になれる教師	2	3	5	5.4%	5	7	12	15.0%	17	9.8%
11 教育への情熱や学び続ける向上心を持っている教師	2	2	4	4.3%	1	2	3	3.8%	7	4.0%
12 その他、無回答の合計	8	6	14	15.1%	3	2	5	6.3%	19	11.0%
合 計	58	35	93	100%	41	39	80	100%	173	100%

※回答は複数回答のため、表中の人数は延べ人数である。

表6〔現時点で自信がある教員の資質は何か?〕
について

1年生、2・3年生共に自信がある資質は似通っているといえる。全体での上位は、〔学び続ける向上心〕が最も高く54人、17.3%、次いで〔同僚と協調・協力して取り組む力〕49人、15.7%、〔生徒に対する教育的愛情と責任感〕が46人、14.7%、〔心豊かな人間性〕38人、12.2%、〔人間関係力、コミュニケーション力〕35人、11.2%であった。1年生と2・3年生を比較した特徴は、〔同僚と協調・協力して取り組む力〕と〔人間関係力、コミュニケーション力〕がそれぞれ2.3ポイント、3.7ポイントと、2・3年生が高くなっていることがあげられる。これは、入学以来大学での授業や様々な活動、大学以外での活動や人との交流等の経験が自信となっているものと考えられる。2・3年生が3.2ポイント減少したのは〔生徒の成長・発達への深い理解〕であった。教職課程の授業を通じて、教育の原点が生徒理解であることを認識した結果、実際にその資質を養う機会が乏しい現

実に直面したことなどから自信には結びついていないものと考えられる。

表7〔現時点で自信がない教員の資質は何か?〕
について

上位を占めた回答が1年生と2・3年生でほぼ同じであった。全体での上位は、〔教科等に関する専門知識〕が88人、16.5%で最も高く、次いで〔実践的指導力〕が79人、14.8%、〔人間関係力、コミュニケーション力〕が63人、11.8%、〔教育者としての使命感〕50人、9.4%、〔生徒の成長・発達への深い理解〕49人、9.2%などであった。さらに、30人以上があげている項目は多い順に、〔広く豊かな教養と社会的常識〕、〔課題解決力〕、〔同僚と協調・協力して取り組む力〕、〔生徒に対する教育的愛情と責任感〕の4項目であった。いずれも教員として欠かすことができない資質である。

〔人間関係力、コミュニケーション力〕は自信がある資質でも上位にあったが、自信がない資質でも上位に出てきていることに注目したい。これは、人間関係やコミュニケーションに関し

表6
現時点で自信がある教員の資質は何か?

(単位:人)

質 問 項 目	「教師論」履修の主に1年生				「生徒・進路指導論」履修の2・3年生				合計 人数	合計の 割合
	秋田C	本荘C	合計	割合	秋田C	本荘C	合計	割合		
1 教育者としての使命感	4	6	10	5.6%	5	5	10	7.4%	20	6.4%
2 生徒の成長・発達への深い理解	7	4	11	6.2%	2	2	4	3.0%	15	4.8%
3 生徒に対する教育的愛情と責任感	17	12	29	16.4%	7	10	17	12.6%	46	14.7%
4 教科等に関する専門的知識	4	1	5	2.8%	4	2	6	4.4%	11	3.5%
5 広く豊かな教養と社会的常識	4	4	8	4.5%	3	6	9	6.7%	17	5.4%
6 心豊かな人間性	13	8	21	11.9%	8	9	17	12.6%	38	12.2%
7 課題解決力	6	6	12	6.8%	4	2	6	4.4%	18	5.8%
8 人間関係力、コミュニケーション力	12	5	17	9.6%	9	9	18	13.3%	35	11.2%
9 同僚と協調・協力して取り組む力	16	10	26	14.7%	9	14	23	17.0%	49	15.7%
10 実践的指導力	1	1	2	1.1%	0	0	0	0.0%	2	0.6%
11 学び続ける向上心	20	11	31	17.5%	10	13	23	17.0%	54	17.3%
12 その他	2	3	5	2.8%	1	1	2	1.5%	7	2.2%
合 計	106	71	177	100%	62	73	135	100%	312	100%

※回答は複数回答のため、表中の人数は延べ人数である。

表 7
現時点で自信がない教員の資質は何か？

(単位：人)

質 問 項 目	「教師論」履修の主に 1 年生				「生徒・進路指導論」履修の 2・3 年生				合計 人数	合計の 割合
	秋田 C	本荘 C	合計	割合	秋田 C	本荘 C	合計	割合		
1 教育者としての使命感	24	12	36	10.3%	6	8	14	7.6%	50	9.4%
2 生徒の成長・発達への深い理解	19	10	29	8.3%	8	12	20	10.8%	49	9.2%
3 生徒に対する教育的愛情と責任感	14	9	23	6.6%	4	3	7	3.8%	30	5.6%
4 教科等に関する専門的知識	31	24	55	15.8%	12	21	33	17.8%	88	16.5%
5 広く豊かな教養と社会的常識	19	10	29	8.3%	5	12	17	9.2%	46	8.6%
6 心豊かな人間性	9	11	20	5.7%	2	7	9	4.9%	29	5.4%
7 課題解決力	13	10	23	6.6%	5	12	17	9.2%	40	7.5%
8 人間関係力、コミュニケーション力	25	20	45	12.9%	7	11	18	9.7%	63	11.8%
9 同僚と協調・協力して取り組む力	13	10	23	6.6%	6	5	11	5.9%	34	6.4%
10 実践的指導力	27	20	47	13.5%	11	21	32	17.3%	79	14.8%
11 学び続ける向上心	7	10	17	4.9%	3	4	7	3.8%	24	4.5%
12 その他	1	0	1	0.3%	0	0	0	0.0%	1	0.2%
合 計	202	146	348	100%	69	116	185	100%	533	100%

※回答は複数回答のため、表中の人数は延べ人数である。

て、得手と不得手が学生によっては両極端であることを示している。これらの力が得手の学生だけが教職課程を履修しているのではなく、不得手の学生も多く履修していることを授業者は認識しながら対応する必要がある。学校の教員は生徒の前で教壇に立ち、生徒の反応を観察しながら授業をする際に、説明したり、応答したりする立場であることから、当然そうしたことができる学生が教職の道を考え、履修しているものと思われがちだが現実には上記のとおりである。不得手な学生は言う。「教職課程の授業を通じて、自分の弱点であるコミュニケーション力をつけたい。そして、そうしたことが苦手な生徒や人と対応する時に、しっかり意志疎通を図り、彼らの考えや個性を引き出せるようにしたい」と。

表 8 「自信がない教員の資質を今後どう克服しようと考えているか？」

1 年生も 2・3 年生も回答が似通っているため、初めに全体の上位を見ることにする。最も多かった克服したい点は、「多くの人と交流し、

気配り等を学びコミュニケーション力を高める」が52人、25.1%であった。これは1年生では他を圧倒して多かったが、2・3年生では3番目であり、学年が進行するにつれて人との関わりが広がり、少しずつコミュニケーション力が身に付いていくのではないと思われる。全体で2番目に多かったのは「大学の授業も含め教科等に関する専門的知識を深める」で、38人、18.4%であり、次いで3番目は「前向きに教職科目の授業に取り組み理解を深める」が34人、16.4%であった。この2・3番目は、表7の自信がない資質で上位1・2番を占めた部分と対応している。これらは、学校の教員が専門職としてしっかり備えていなければならない主軸となる資質であり、学生の多くはこの部分に対して自信を持てずに、たえず課題意識を持ちながら、真剣に何とかしなければならないと考えていることが分かった。4番目は「アルバイトやボランティア活動等で社会経験を積む」が24人、11.6%。5番目が「将来の授業に役立つよう人前で堂々と話せるよう訓練する」が16人、7.7

表 8
自信がない教師の資質をどう克服しようと考えているか？

(単位：人)

質 問 項 目	「教師論」履修の主に1年生				「生徒・進路指導論」履修の2・3年生				合計 人数	合計の 割合
	秋田C	本荘C	合計	割合	秋田C	本荘C	合計	割合		
1 多くの人と交流し、気配り等を学びコミュニケーション力を高める	22	19	41	31.8%	7	4	11	14.1%	52	25.1%
2 前向きに教職科目の授業に取り組み理解を深める	16	6	22	17.1%	5	7	12	15.4%	34	16.4%
3 将来の授業に役立つよう人前で堂々と話せるよう訓練する	10	5	15	11.6%	1	0	1	1.3%	16	7.7%
4 アルバイトやボランティア活動等で社会的経験を積む	8	9	17	13.2%	3	4	7	9.0%	24	11.6%
5 教師としての在り方や責任感を持てるよう意識して努める	6	4	10	7.8%	2	2	4	5.1%	14	6.8%
6 大学の授業も含め、教科等に関する専門的知識を深める	5	11	16	12.4%	8	14	22	28.2%	38	18.4%
7 目標とする先生の指導法をまねるなどして授業力をつける	1	1	2	1.6%	3	2	5	6.4%	7	3.4%
8 実践的指導力を身に付けるため意識的に活動する	1	1	2	1.6%	5	5	10	12.8%	12	5.8%
9 その他	1	3	4	3.1%	3	3	6	7.7%	10	4.8%
合 計	70	59	129	100%	37	41	78	100%	207	100%

※回答は複数回答のため、表中の人数は延べ人数である。

%であった。この4・5番目は、1番目のコミュニケーション力を高めるという項目と通じるものがある。

特筆すべきは、全体では7番目だった〔実践的指導力を身に付けるため意識的に活動する〕についてである。1年生では2人、1.6%と低い順番にあったが、2・3年生では10人、12.8%と4番目に多かった。2・3年生は、教職課程の様々な科目の授業を通じて教員の専門性や指導力に関する知識が備わり、その重要性から実践力を備える必要性を強く感じていることの表れと考える。

(2) 4年生の「教職実践演習」履修カルテの自己評価結果より

表 9 必要な資質能力についての自己評価

自己評価が3-4あるいは4-5と高かったのが〔Ⅲ 他者との協力〕、3-4の比率が高かったのが〔Ⅳ コミュニケーション〕と〔Ⅶ 課題探究〕であった。さすがに4年生は、大学での授業や研究、サークル活動や様々なイベント、他大学や地域、関係団体との連携・協力や交流、アルバイトやボランティア活動等の多

くの経験をしたことが〔Ⅲ 他者との協力〕や〔Ⅳ コミュニケーション〕ができる力を培ったものと考えられる。このことは、前述した人間関係力やコミュニケーション力を苦手としている学生が1年生を中心に多く存在したが、本人自身が自己課題として意識しながら学生生活を過ごすことにより、克服できることを物語っていると言えるのではないだろうか。

〔Ⅶ 課題探究〕については、本学が1年次から自主研究を奨励して専門分野への研究心や探究心を養うことを特徴としており、4年次までの研究活動を通じて培われた結果であり、両学部とも理学系・工学系・農学系を専門としていることから、学内外での研究活動や研究発表等の場で鍛えられるため、必然的に課題探究力が育まれるものとする。このように学校の教員に必要な資質は、必ずしも教職課程の授業だけでなく、専門学科の授業や研究、教養科目の授業等を通じても養えるものである。さらに、学外の関係機関や地域の人々と共同して物事に取り組むことなどでも培えるものでもある。結局は、学生自身の自覚と意識にかかっていると

表 9
必要な資質・能力についての自己評価

(単位：人)

評価項目 \ 評価段階		0 - 1	1 - 2	2 - 3	3 - 4	4 - 5	小計	合計
I	学校教育についての理解	0	0	11	5	1	17	30
		0	0	8	4	1	13	
II	子どもについての理解	0	0	11	5	1	17	30
		0	1	7	5	0	13	
III	他者との協力	0	0	0	13	4	17	30
		0	0	1	9	3	13	
IV	コミュニケーション	0	0	6	10	1	17	30
		0	0	5	6	2	13	
V	教科・教育課程に関する基礎知識・技能	0	0	10	5	2	17	30
		0	1	8	4	0	13	
VI	教育実践	0	0	10	6	1	17	30
		0	0	7	6	0	13	
VII	課題探求	0	0	4	11	2	17	30
		0	0	3	9	1	13	
合計		0	2	91	98	19	210	210

※平成27年10月「教職実践演習」履修カルテの自己評価より作成した。

※評価項目の I～VII の上段は、生物資源学部の、下段はシステム科学技術学部の学生の数字である。

言える。

一方、自己評価が 2 - 3 と低かった項目は、〔I 学校教育についての理解〕や〔II 子どもについての理解〕、〔V 教科・教育課程に関する基礎知識・技能〕、〔VI 教育実践〕であった。これらはいずれも表 7 で示した 1 年生、2・3 年生が〔自信がない教員の資質〕と一致している。4 年生になればこうした教員の本分ともいえる資質については 1～3 年生より自信を持っているのではないかと思われたが、そうではない結果であった。

このことは、教育実習を既に経験した 4 年生が、教職課程や専門学科等で学んだことを初めて生徒の前で実践してきたわけだが、その彼らが上記項目について自己評価を低くしているのは、教育実習での反省を反映させているからであろう。教職課程を履修してきた 4 年生は、教員の専門性や使命、役割を認識した上で、教員としての意識を高めながら、教育実習に向けた授業づくりの準備をしてきた。いろいろ調べたり考えたりして、学習指導案や授業シナリオともいえる細案（板書計画、発問計画等を含む）等を作成し、事前に模擬授業も経て本番に臨んだ。しかし、大半の学生は満足できる授業がで

きなかった、生徒対応は難しかったなどと「教育実習記録簿」に記載している。こうした実体験の反省が自己評価を低くしているようだ。

教員の仕事は厳しく難しい部分もある。それを実際に感じ取り、力不足を素直に反省している姿は、自らを高めていくための条件を備えていることを示している。教師は「反省的实践者」とも言われる。反省なしに教材研究や指導の改善はできないものである。この反省を次に生かして欲しいと思う。

ただし、多くの学生が「教育実習記録簿」に、実習の後半になって生徒と授業等で交流をすることができたことを記しており、わずかではあろうが教員としての喜びを実感し、教職という職業の魅力の一端に接することができたようだ。大半の学生が、厳しくも充実した教育実習を経験できたと言いながら明るい表情で報告しに来てくれた時は、一皮むけた表情の彼らに対して担当者としてほっとしたものである。

4 実態調査結果のまとめと考察

本学で教職課程を履修している学生数や割合は、1 年次から 4 年次に至るまで学年進行で人

数や履修率が減少している。この6年間の平均で、システム科学技術学部では29.3人、11.9%から15.0人、7.0%に減少。生物資源科学部では、35.0人、22.0%から17.7人、11.8%に減少している。

そして4年次の教育実習を経てめでたく卒業時に教員免許状を取得できた人は、この13年間で、システム科学技術学部で148人（年平均11.4人）、生物資源科学部で216人（年平均16.6人）だった。また、卒業生に占める免許取得者率はシステム科学技術学部で5.1%、生物資源科学部で12.7%であった。平成14年度以降大学全体での免許状取得者数は30人前後で推移してきたが、平成22年度以降は30人以上を維持してきている。

この履修率や取得者率は、教員養成系学部・学科でない他大学の学部・学科と比較して多いのか少ないのかは今回調べていないので分からないが、4年間教職課程を履修し最後まで全うしてきた学生は、履修していない学生には得難い貴重な学びや経験を積み、各自の教員の資質として、また人間性の向上等に役立っていると思われる。

2015（平成27）年3月に卒業した学生の声をいくつか紹介する。「幅広い視野に立って物事を見聞きできるようになった」、「専門分野の授業や研究を高校の授業と関連づけて考えるようになった」、「人前でしっかり自分の考えを話せるようになった」、「人の話すことに対して傾聴し、共感的理解ができるようになった」、「多様な人々と接する術を身に付けることができた」、「食生活の改善を中心に基本的な生活習慣を身に付けることができるようになった」等の声が複数あった。こうした声から、教職課程の授業等を通じて教員として必要な資質・能力の向上に努めることは、何よりも人間として学生自身を成長させることに繋がったと考えられる。今後は、こうした教職課程の授業の意義や特質を入学時のオリエンテーションや年度当初の教職課程ガイダンスで担当者は学生に伝えるべきと考える。さらに、教職課程を履修している学生には、教師の使命とともに、求められている教師像、厳しさや難しさ、喜びや充実感等をそれぞれの授業で具体的に伝えることにより、履修離

れを防げるのではないかと考える。また、教員の適性が備わっているかを見極めを学生自身に早い段階で意識させることにも役立たせることができるのではないかと考える。

学校教員の就職状況では、開学当初から数年はあまり教職に就く人はいなかったが、平成19年度以降は切れ目なく就職しており、特に平成23年度以降は2～5人が教職に就くようになった。今後も、教職の道に進みたいと考える学生は一定程度存在するものと考えられることから、すでに実施している「教員採用試験対策セミナー」や秋田県教育委員会が平成26年度から本学で実施している「教員採用試験説明会」などへの参加者を増やしながら、教員採用試験にチャレンジする学生を確保するとともに、授業以外でも教職を目指す学生への支援方法を具体化するための取組が必要ではないかと考える。

5 意識調査結果のまとめと考察

表4の教員免許状の取得目的に関しては、全体合計で〔資格取得のため〕と〔今はとりあえず〕を合わせると105人、52.2%であり、〔将来教員採用試験の受験もあり得るので〕と〔教員採用試験の受験のため〕を合わせた70人、34.8%を圧倒して多かった。学年進行とともに教職課程の履修者が減る傾向にある背景には、上記のような教職に就くことに消極的な目的意識で履修している学生が多いことがあるように考えられる。しかし、2・3年生になるとしっかりした目的意識を持つ傾向が高まることから、こうした意識を持っている学生が本気で教職を考えるような指導上の工夫が必要であると考えられる。

表5の将来目指したい教師像についての意識調査で上位を占めた項目をまとめて表現してみると、「分かり易い授業ができ、専門性に優れ、生徒の個性を尊重しながら、考えや気持ちをしっかりと受け止めながら、学習指導だけでなく生徒指導や進路指導においても親身になり、責任を持って生徒を支援できる信頼される教員」の姿が浮かび上がってきた。これは、昭和62年～平成24年にかけて中教審の教員養成部会から出された答申と、それらを受けて文部科学省が通達等で示した「教師に求められる資質能力」とは

ば一致していることから、本学の学生が目指す教師像は理想的な教師像であり、妥当な意識を持っていると言える。

次に、表6の現時点で自信がある教員の資質についての回答結果を全体合計の比率が高い項目順に見ると、〔学び続ける向上心〕、〔同僚と協調・協力して取り組む力〕、〔生徒に対する教育的愛情と責任感〕、〔心豊かな人間性〕、〔人間関係力、コミュニケーション力〕であった。一方で、自信がある資質としての回答が少なかった項目は、比率が低い順に〔実践的指導力〕、〔教科等に関する専門的知識〕、〔生徒の成長・発達への深い理解〕、〔広く豊かな教養と社会的常識〕、〔課題解決力〕の5項目であり、これらは表7の現時点で自信がない教員の資質とも関連している。

表7の自信がない資質では、高かった順に〔教科等に関する専門的知識〕、〔実践的指導力〕、〔人間関係力、コミュニケーション力〕、〔教育者としての使命感〕、〔生徒の成長・発達への深い理解〕、〔広く豊かな教養と社会的常識〕等であり、〔人間関係力、コミュニケーション力〕以外は、表6の結果とほぼ一致していた。表6の回答数が1年生で177人、2・3年生で135人、全体合計で312人だったが、表7の回答数は、1年生で348人、2・3年生で185人、全体合計で実に533人であり、自信がない資質の回答数の合計が、自信ある資質の回答数の合計の1.7倍であった。現時点で、自信がない資質を複数抱えている学生が相当数存在することが分かった。学生が自信がないと自覚している資質は、教員として欠かすことができない資質であることを学生はもちろんであるが、教員養成を担う立場にある本学の授業担当教員はこれらの実態を認識して指導する必要がある。

その弱点ともいえる資質を学生は今後どう克服しようと考えているか、については表8で把握できた。上位の4項目は大きく2つに分類できる。1つは、延べ76人、36.7%の学生が、〔学内外での人との交流や様々な経験を積み重ねることで人間関係力や対応力を身に付けよう〕と考えていること。もう1つは、述べ72人、34.8%の学生が、〔教科の専門性や教職の専門性について大学の授業を中心に積極的に自分の

ものにするために取り組もう〕と考えていることが分かった。この前向きで主体的な取組姿勢を評価するとともに、大いに歓迎したい。

しかし、表9の4年生の履修カルテの自己評価結果でも確認したように、1年生、2・3年生とともに「資質で自信がない」としてあげられている項目は、教育実習を終えた4年生の自己評価でも低い評価になっていることが明らかになった。教育実習には、3月上旬の事前ガイダンス等の指導に始まり、4月下旬の直前ガイダンスまで期間を集中してかなり周到に準備して臨んだはずであったが、結果的には多くの学生が自分の力のなさや指導力不足を実感する機会となった。個人差もあると思われるが、学生たち自身が自己の資質を伸ばそう、改善しようと取り組んでも学生自身の力ではどうしても限界があり、獲得できない資質の分野があるように思われる。そうだとすれば、それが何かを把握した上で、彼らにとって不足している部分について教員を養成する大学として責任を持って対応できるような環境を整える必要があるのではないだろうか。

そもそも教員としての資質を養い、身に付けることは教職を目指そうとする学生自身の自覚と自己努力によることは言うまでもないことであるが、これらの資質の多くは、実際に生徒と接することによって養われたり身に付けられたりする部分も少なくないものであることから、教員養成のために設けられている本学の教職課程としてもこの事実をしっかり受けとめ、質の高い教員を養成するために今後何らかの具体策を打ち出していかなければならないと考える。

6 おわりに

今回の実態調査や意識調査から、本学で教職課程を履修している学生の姿がある程度見えてきた。

一つは、教職課程を履修したのはいいが、授業等で教職の道が意外に険しいということが徐々に分かり、自分には無理だ、自分には教員の適性がない、他にやることがあるなどの理由から途中で離脱してしまう学生が多いという実態である。

二つ目は、教員採用試験を受験するという意志をはっきり持って教職課程を履修している学生が少ないという実態である。しかし、これについては面談で取材した話を参考に考えると、潜在的に教員採用試験を受験したいと考えている学生が数字には出てこないが存在することが分かった。

そして三つ目は、極少数ではあるが、はっきり教員になるという意志をしっかり抱いて専門学科と同じように教職課程に取り組んでいる学生もいることが分かった。

現在も関東圏や関西圏では、地方に比べて教員採用試験の採用人数が多く、倍率も低くなっており合格しやすい環境にあるといえる。しかし、地方出身者が多い本学の学生は、教員になるならどちらかという地元志向が強い傾向にある。地方における限られた採用者数による高倍率が彼らの前に壁となって立ちはだかっているようだ。その壁をぶち破るには、教員採用試験に勝てるだけの力や資質等を身に付けなければならない。

本学の学生たちは大半が真面目である。出席状況や授業態度も、宿題への取組やレポートの内容も若干の個人差はあるものの概ね優れていると言っていい。しかし、どこか自信がないところを持っている学生が多い。そうした彼らに力を付けさせ、自信を持たせたいと考えるのは、教職課程担当者だけではないと思う。

教職課程としては、現在座学の理論中心の授業が主である。それは教員の基盤として最も大切である。それらに加えて、教育実習の前に、実際に学校現場と関わる機会を設けられないだろうか、生徒と接する機会や学校の教員の仕事を体験させることはできないだろうかなど実践的な経験をさせる機会を設けることで質の向上が図れるのではないかと今回の調査を通じて考えたところである。

これらの結果や考察を踏まえて、来年度はより具体的に、本学の教職課程の授業において、担当教員はどのようなことを共通した認識として持つ必要があるか、どのようなことを意識して授業を通じて学生に教員としての資質・能力、適性を養ったらいいか、実践的指導力を身に付けさせるにはどのような工夫をしたらいいかな

どについて先進例を調査しながら考察する。

そして、その先において、本学の教職課程運営委員会が果たすべき役割や在り方等についても考察したい。

参考文献

- 下村哲夫 (1998). 『教育のみらい 学校のゆくえ』. 東京：教育出版
- 高谷哲也 (編著) (2011). 『教師の仕事と求められる力量』. 京都：あいり出版
- 久富善之・長谷川 裕・山崎鎮親 (編) (2011). 『図説 教育の論点』. 東京：旬報社
- 岩田康之・高野和子 (編) (2012). 『教職論』. 東京：学文社.
- 赤星晋作 (編著) (2014). 『新教職概論』改訂版. 東京：学文社.
- 沼田裕之・増渕幸男 (編著) (2015). 『教育学2 1の問い』. 東京：福村出版.
- 教育職員養成審議会 (1987). 『教員の資質能力の向上方策等について』
- 教育職員養成審議会 (1997). 『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について (第1次答申)』
- 教育職員養成審議会 (1999). 『養成と採用・研修の円滑化について (第3次答申)』
- 中央教育審議会 (2005). 『新しい時代の義務教育を創造する (答申)』
- 中央教育審議会 (2006). 『今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)』
- 中央教育審議会 (2012). 『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)』
- 教育再生実行会議 (2015). 『これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について (第七次提言)』
- 中央教育審議会 (2015). 『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について (教員養成部会 答申素案)』
- 文部科学省HP 「教員をめざそう！」 「魅力ある教員を求めて」 n.d.